

徳島大学病院泌尿器科科長



金山 博臣

回答 前立腺がんは男性のがんで、50歳を超えると発生頻度が増し、近年は増加しています。早期発見にはPSAの血液検査が有用で、4.0ng/mlを超えたとがんの可能性が高く、組織検査(前立腺生検)で診断します。がんが発見されると、がんの進行度、悪性度を参考に治療法を決めます。転移がなく、がんが前立腺内にとどまる早期(限局性)前立



質問 70代の男性です。血液検査でPSA(前立腺特異抗原)が4.9ng/mlあり、生検の結果、12カ所中2カ所にがんがある前立腺がんと診断されました。他に異常はありません。治療法をお聞かせください。4年前に胆のう炎で開腹手術をし、約60年前には腹膜炎を患ったこともあり、3カ所に傷跡があります。

早期前立腺がんの治療法

進行度・悪性度で異なる

持病や年齢などで手術や放射線治療が難しい場合、また、患

腺がんの場合は根治が期待できます。主に手術、放射線治療が勧められます。手術は75歳以下、放射線治療は80歳以下の方に勧められますが、元気な方はこの限りではありません。手術には開腹手術と腹腔鏡手術があり、今年4月から、ダヴィンチシステム(手術支援ロボット)を用いた腹腔鏡下前立腺摘除術が保険適応になりました。詳細で正確な手術が可能になり、手術成績の向上、合併症の軽減が期待できます。四国では現在、徳島大学病院のみで受けられます。

一方、放射線治療には、小さな線源を前立腺内に埋め込む小線源治療と、体の外から照射する外照射治療があります。手術の合併症には出血や尿失禁など、放射線治療の合併症には頻尿・排尿痛や直腸出血などがあります。



【左】ダヴィンチシステムを用いた腹腔鏡下前立腺摘除術の様子【右】モニターを見ながら操作する医師(いずれも金山科長提供)

者さんが手術や放射線治療を希望しない場合にはホルモン治療も選択できますが、性機能障害や更年期障害様の症状など合併症の可能性もあります。根治治療ではないため効かなくなることもあります。治療法の選択には、がんの悪性度も参考になります。がんの悪性を表すグリソンスコアが6以下は低リスク(低悪性度)、7は中リスク(中間悪性度)、8以上は高リスク(高悪性度)と判定します。

PSAが低値でがんが小さく低リスクの場合には、無治療で経過観察する「待機療法」も選択できます。治療をせずにPSA検査をしなから様子を見て、PSAの値が上昇するようなら治療をします。相談者は70代で、PSAは4.9ng/mlと比較的低く、12カ所中2カ所のみでがんが発見されています。前立腺内にとどまっている早期がんです。一般的には手術か放射線治療が勧められますが、ホルモン治療も選択できます。低リスクの場合には、待機療法も選択可能です。

手術の場合、胆のう摘除術、腹膜炎の経験があるので、腹膜や腸管の癒着でロボット支援手術ができない可能性があります。そのときは従来の腹腔鏡手術、開腹手術になります。放射線治療の場合には小線源治療、外照射療法ともに選択可能ですが、高リスクの場合は外照射療法とホルモン治療を併せるのが適切だと思います。

早期がんの場合にはいろいろな治療法が選択できます。主治医とよく相談し、ご自身の希望する治療法を選んでください。

質問募集 がんに関する悩み「徳島がん対策センター」がお答えします。質問内容を詳しく書き、住所、氏名、年齢、性別、電話番号を明記し、〒770-8572 徳島新聞社文化部「がん相談」係へ。紙上に住所、氏名、電話番号は掲載しません。同センターへ電088(6333)9438でも平日午前8時半〜午後5時に受け付けています。